

テーマ説教を導入した理由)

さて皆さんは、今月の月間予定表をみて今週と来週のメッセージがイザヤ書ではないということに気づかれたと思います。私はこの富川福音教会に赴任してから、基本的に講解説教。つまり、一つの書簡を最初から最後までずっと連続してメッセージをしていく。そのような形のメッセージをしてきました。

それは聖書をぶつ切りにして、自分の好きな所だけ。つまみ食いするようなさうゆう読み方では、聖書が本当に言いたいことを受け取ることができないと思っているからです。

みなさんは、聖書をまるでおみくじを引くような気分で、「神様、今の私に必要なみ言葉を教えてください」というような感じで祈って、パッと聖書を開いて目に止まった御言葉が神様の御心を示す御言葉だ。 というような感じで聖書を読んだことはないでしょうか。

神様は、私達の弱さを知っておられるお方ですから、ときには、そのようなやり方を通して御心を示すということもあるかもしれません。でも、それは神様が聖書のみことばを書かせるために導いた文脈とか、その文脈によって積み重なっている神様のみことばの深い意味を無視してしまうことになると思うので、私はあえて文脈を強調した講解説教をしてきました。

しかし、同時にこのような説教のやり方で良いのだろうか。という疑問をいつも持っていました。創世記、黙示録、イザヤ書といった長くて難しい箇所をずっと読んでいくと御言葉に対する集中力をうしなってしまうたり、講解説教は文脈的に聖書を理解するには有益なのですが、どうしても聖書を理解しようとする視点が、聖書が書かれたその時の背景や文脈に限定されてしまったりして、聖書全体を通して神様が何を教えてくださっているのか。という広い視点をもって聖書を理解するのは難しい部分があります。

ですから、月の前半は今まで通り講解説教をする形を維持しつつ、月の後半の2週間はテーマにそって聖書全体から神様は何を教えておられるのかをメッセージする形でチャレンジさせていただこうと思ったわけです。

あとは。講解説教よりはテーマ説教の方がはじめて教会にくる人とか、あまり聖書のことを知らない人にも理解し易いメッセージを作りやすい面もあるので、月の後半は、このようにテーマ説教をさせていただきたいと思います。

なぜ、聖書が必要なのか?)

さて、今日のテーマは「聖書とはなにか？」というテーマですが、このテーマを取り扱う前に、そもそもなんで聖書が必要なのか？という話をしたいと思います。

みなさん、私達は毎週このように聖書を読んでいます。ではなぜ、私達はこのように毎週聖書を読まなければいけないのでしょうか。そもそもなんで牧師は聖書に基づいてメッセージをしなければいけないのでしょうか。

世の中の宗教家たちの中には、このような聖書みたいな経典を使わないで、自然の営みとか、人間の心の動きなどから、「人はこのように生きたほうがよい。」という話をする人たちがいます。

実際、日本に昔からある宗教というのは仏教ではなくって神道なんですけども、神道には聖書みたいな経典はないそうです。だから、「経典や教えがないから神道は宗教ではない。」なんていう人がいますけども。でも、多くの人からみれば神道は間違いなく宗教なわけです。このようにみると、世の中の宗教には経典を使わなくても人の生き方を教える人たちがいるし、経典がなくても宗教として成り立っている宗教があるわけです。

では、なぜ私達は「聖書が大切なのだ！」「聖書こそが私達の唯一絶対の規範なのだ」といって、この聖書をありがたがるのでしょうか。なんで、私達にとって聖書がそれだけ大切なのでしょうか。実際、聖書を見てみると、この聖書のみことばがなかったとしても、自然を見る中で神様の栄光を仰ぎ見たり、人の心の動きによって神様の前に言い訳ができなくなったり、そういうことがあることを示す。聖書のことばがあります。実際みてみましょう。

ローマ人への手紙 1 章 20 節

1:20 神の、目に見えない性質、すなわち神の永遠の力と神性は、世界が創造されたときから被造物を通して知られ、はっきりと認められるので、彼らに弁解の余地はありません。

同じくローマ 2 章 14 節

2:14 律法を持たない異邦人が、生まれつきのままで律法の命じることを行う場合は、律法を持たなくても、彼ら自身が自分に対する律法なのです。

このように聖書の中にも、大空などの自然を含めた神様が創造された被造物の中に神様の力と神性がはっきりと認められると書かれており、聖書の律法をもっていなくても生まれつきのままの律法があると書かれていたりします。

だから、聖書を読まない人たちでも、自然をみてなにか神的なものを感じたり、聖書に書かれている律法を知らなかったとしても、人は殺してはいけないとか、盗んではいけないといった。神様が禁止されているルール・律法を心の中に持っていたりするわけです。

自然をみて神様がわかって、生まれたつき律法をもっているなら、聖書をよまなくてもいいのではないのでしょうか？ 聖書なくても神様のことや、神様のルールがわかるのになぜ、私達は聖書を読まなければいけないのでしょうか。

それは聖書にかかれていることは、神様からの特別な啓示だからです。

聖書は特別啓示)

啓示というのは、このような字を書きます。訓読みをすると「ひらき・しめす」となります。啓示というのは、神様が隠されていることをひらいて、しめすことです。

みなさん、私達と神様は同じ次元の存在ではないですよ。私達は神様に似たものとして造られましたが、神様ではない。私達はなにかを作り出すことはできますが、神様のように何もない状態から世界を造ることはできません。私達は今、確かに生きていますが、神様みたいに永遠に存在するものではありません。そして、私達は限界がある存在ですが、神様は限界がない無限なお方です。だから、私達が神様を知ろうとしても、私達は神様のすべてを知ることはできません。それは例えば、小さな虫が、私達人間の思考や知識を理解することができないのと同じです。私達がどんなに虫に私達の生活を見せたとしても、虫に料理を作らせたり、パソコンを操作させたり、車を運転させることはできないわけです。それは虫と私達の間には大きな知能の違いがあるからです。

それと同じように、私達と神様にはあまりにも大きな違いがあり、神様は私達の間からみると、わからないところだらけのお方なのです。ある意味で私達には隠されているところがいっぱいあるわけです。だから、神様は、私達が神様のことを理解できるように啓示を与えてくださいました。

さきほど話した。自然をみてなんとなく神様を感じるとか、生まれ持つての良心によって神様が嫌われることをなんとなく理解できているとか。そういうのも神様からの啓示です。これをです。 **難しい神学用語では一般啓示**といいます。

ただ、この一般啓示だけで、神様が求めている生き方を私達が実行し、罪を犯したら悔い改めて、【主】イエスキリストを信じることによって、神様の子供になることができるかということ、それはできないのです。

なぜならば太陽が登って日が沈む。その自然をみるだけでは、イエス様が私達の罪を背負って、十字架にかかって死んでくださった。ということはわからないし、心の中の良心だけでは、本当の意味で神様の御心に従って生きていくということ。間違っただらば悔い改めて、イエス様を信じて神様と共に生きていくということではできないのです。

だから、神様は特別な啓示を人に与えて、私達が明確に神様の御心を知り、神様が示された道を歩んで、神様と共に生きていけるようにしてくださったのです。その特別な啓示が書き記されて、それらの書簡を集めたものがこの聖書なのです。

では、この聖書には何が書かれているのでしょうか。神様の奇跡、イエス様の奇跡が書かれています。イザヤ書のように神様から預言者に預けられた特別なことばが書かれています。何よりも私達人間が、神様のことを知れるように、神様ご自身であるお方が人になって、神様のことを示してくださったイエス・キリストのことが書かれています。その【主】イエスキリストこそ、最高の啓示と言っていいと思います。これは一般啓示では理解できない、神様のことを、特別な形で私達に示してくださった啓示のことを神学用語では特別啓示といい、聖書はその特別啓示が書き記されたものなのです。

そしてこの特別啓示がなければ、本当の意味で私達は神様と共に生きていくことはできないのです。さて、ここで一つ問題を出したいと思います。神様が私達に特別に与えてくださった特別啓示。この特別啓示は人間が罪を犯す前にもあたえられていたのでしょうか？ いなかったのでしょうか？ 答えは、人間が罪を犯す前にも与えられて「いた」が正解です。

創世記 2 章 16-17 節を読んでみましょう。

2:16 神である【主】は人に命じられた。「あなたは園のどの木からでも思いのまま食べてよい。**2:17** しかし、善悪の知識の木からは、食べてはならない。その木から食べる時、あなたは必ず死ぬ。

これは人間が罪を犯す前に神様がいわれたことばです。この時にはすでに善悪の知識の木はエデンの園の中央にありました。いのちの木とならんで善悪の知識の木があったのです。でも、神様に園のどの木からも食べていいけど、この木から食べてはいけないよ。って特別に言われなければ、アダムたちは神様の御心にそって生きることはできなかったのです。神様が創造された世界。そして、その中でも特別に

整えられたエデンの園の罪によって墮落していない一番いい状態を見ていたとしても、アダムは神様の御心を理解することができなかつたのです。実際、このようにして言葉にして御心を示されなければ、彼は神様の御心通りの生き方はできなかつたのです。ですから、ある意味でこのみことばは神様からアダムに与えられた預言なのです。だから、特別啓示というのは私達を罪から救うだけではないのです。私達が、神様の御心に完全に従うために、神様と一番良い関係を持ち続けていくために私達に必要なものなのです。だから、神様は、この特別啓示の集合体である聖書を私達に与えてくださったのです。だから、聖書は私達が神様を愛し、神様と最高の関係を築き上げていくための、神様からのプレゼントと言っていると思います。

聖書は靈感によって書かれた)

さて、今日の3つ目のポイントになりますが、特別啓示の集合体である聖書はどのように書かれたかという、今日の最初のみことば、第二テモテ3章16節を読んでみましょう。

3:16 聖書はすべて神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練のために有益です。

これは聖書信仰を持つ人ならば必ず覚えてほしいみことばです。聖書はすべて神の靈感によると書かれています。

昔、私が小学生の頃に靈感商法ということばがテレビのニュースになっていました。靈感商法というのは、まるで靈感があるかのように振る舞って、先祖の因縁や霊の祟り、悪いカルマがあるなどの話をして、不安を煽り、印鑑や数珠、壺などの商品を法外な値段で売ったり、不当に高額な金銭などを取る商売の仕方です。例の統一教会などがよくやってと言われることです。

「靈感」というと、この靈感商法みたいに何か神様からの霊的な導きをビビビっ感じる。というものをイメージしやすいですが、実際に聖書を見てみると、例えばルカはどのようにしてルカの福音書を書いたかという、ルカの福音書1章1-3節にはこのように書かれています。

1:12 私たちの間で成し遂げられた事柄については、初めからの目撃者で、みことばに仕える者となった人たちが私たちに伝えたとおりのことを、多くの人がまとめて書き上げようとすでに試みています。

1:3 私も、すべてのことを初めから綿密に調べていますから、尊敬するテオフィロ

様、あなたのために、順序立てて書いて差し上げるのがよいと思います。

ルカがこの福音書を書こうと思った時には既に、多くの人が、イエス様がなされたことについてまとめて書き上げようとしていました。だから、ルカはそうゆうひとたちが先に書き上げたものを調べ、さらには、実際にマリアとかにインタビューをしてどのようなことがあったのかということ調べたのだと思います。そして、その上でこのテオフィロさんが理解できるように順序をまとめて、このルカの福音書を書き上げたわけです。実際、マタイの福音書とマルコの福音書、そして、ルカの福音書を見比べてみると、まったく同じ言い回しのみことばというものが幾つもあります。ということはルカが既に書き上げられているものを引用して書いているから、全く同じ言葉があるということです。

こうしてみるとルカはビビビッと靈感によって神様からのメッセージを受けて、その感じるままに福音書を書いたわけではない。ということがわかります。テオフィロさんに福音を伝えたいという状況があって、彼はもとお医者さんで理系な人間だから、ちゃんと事実を調べて、理性的に順序をまとめて丁寧にルカの福音書を書き上げたわけです。

そして、先程、読んだテモテへの手紙には「聖書はすべて神の靈感によるもの」とありますから、そういった丁寧な下調べと、理性的に順序立てて書かれたルカの福音書も、神様の靈感によって書かれたものと言えるのです。

一方、私達がいままで読んできたイザヤ書などをみると、イザヤは直接神様から幻をみさせられたり、言葉を与えられたりして、それを預言書としてかいている。これも神様の靈感によって聖書が書かれた書物といえます。

つまり、聖書がいうところの靈感というのは、確かに神様から直接示されて書いている物もあるのですが、必ずしもビビビと神の霊の働きを感じて聖書を書かせるようにするものではなくって、時には、私達が生きている環境や状況、人との出会い、その人の人生経験、調べた知識、そうゆうものすべて神様が用いて、私達に伝えたい御心を聖書記者たちに書かせるために、聖霊によって神様が導いたことを、聖書は靈感といっているのです。

だからですね。「聖書はすべて神の靈感による」という御言葉を、あえて意識をするのならば、「聖書はすべて神様のご支配によるもので」と言い換えてもいいかもしれません。神様はルカに、ルカの福音書を書かせる状況や知識、パウロにパウロの手紙を書かせる状況や、パウロの経験などを与えて、そういった様々な要因を完全

にご支配されて、私達に御心を伝えるべく、聖書記者たちに聖書を書かせたわけ
です。

まとめ)

つまり、聖書というのは私達人間が、神様と正しい関係をもち、自然を見るだけ
では理解できない。神様の御心に従って、正しく生きていくために、神様が特別に、
神様自身のことばや奇跡、また聖書記者たちが置かれている状況や、理性や、経験
や知恵などに特別は働きかけをなされて、そのすべてをご支配されて聖書を書かせ、
そして、私達に特別に与えてくださったもの。それが聖書なのです。

だから、聖書はすべて神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練のた
めに有益なのです。

そして、テモテへの手紙 第二 3章 17節にはこのようにも書かれています。

3:17 神の人がすべての良い働きにふさわしく、十分に整えられた者となるためです。

「神の人」というのは、【主】イエスキリストによって救われた私達のことです。
私達が「すべての良い働き」・・・神様が求めておられる働き、神様が喜ばれる働き、
その働きをすることができる十分に整えられた者となるために、神様は聖書記者た
ちに靈感を与え、聖書を書かせたのです。

だから、私達が神の人として十分に整えられるためには聖書が必ず必要なのです。

ホントはですね。「聖書はなぜ権威があるのか。」とか、「なぜ、聖書は旧約 39 卷、
新約 27 卷の 66 卷なのか」とか、そうゆう話もしたかったのですが、今日はここま
でにしたいと思います。

聖書は、自然を見るだけではわからない。神様ご自身がことばにしなければわか
らない特別な啓示が書かれたものです。これは私達が神の人として働きができる。
整えられた者となるために与えられたものです。

この特別啓示である聖書があるからこそ、私達は悔い改めて神様に立ち返り、キ
リストの十字架と復活を信じて、神の子としての歩みをすることができるのです。

聖書は私達に何が神様の御心にかなっているのか。何が正しいかを教え、何が神
様のみこころでないのか、何が間違っているかを戒め、実際に間違ってしまったな
らば正しい道へと矯正してくださり、そして、ますます神様の栄光を現し、神様の

義を示す者となるように、私達を訓練してください。

だから、みなさん、この特別な啓示である聖書が与えられることをまず感謝しましょう。そして、聖書を読むとき、超越的な導きの中で聖書記者たちの状況や能力などのすべてをご支配して聖書を書かせた【主】が、私達を神の人としてふさわしく整えられた者としてくださることを期待し、信仰をもってこの聖書を読んでいきましょう。

パウロは聖書に書かれている十字架のことばを指してこのようにいいました。

コリント人への手紙 第一

1:18 十字架のことばは、滅びる者たちには愚かであっても、救われる私たちには神の力です。

聖書が本当に私達にとって神の力となるのは、十字架にかけられたキリストを信じた者によってなのです。だから、私達は信仰をもって聖書に向き合い、聖書に書かれている【主】の特別なことばによって整えられていきましょう。